王蒙《青春萬歲》冒頭部分の一讀解

――圍い込む「生活」と逃れゆく「憂鬱」――

高屋亞希

I・はじめに

中國共產黨は第三次國內戰爭の過程で、その勢力範圍を農村から次第に都市へと移していく。都市を包圍した人民解放軍は、地下黨員と呼應しながら、次々と都市を解放・接收する。そして一九四九年一〇月一日、ついに人民共和國の成立が宣言される。まさにこの時期、地下黨員としてこの歷史的過程に身を投じ、「自らの青春と人民共和國の青春を重ねる」ようにして、共產黨員のキャリアを積んできた王蒙（一九三四～）は、一九五三年、突如として創作に向かう。新民主主義青年團の業務の傍ら執筆。一年四ヵ月後、長編小說《青春萬歲》の初稿を完成する。(1)

社會主義國家の經濟建設が高潮した一九五二年から五三年を背景に、北京の高校三年の女子學生の青春群像を描いた處女作《青春萬歲》は、黨員作家王蒙による「個人と國家の青春の一致」の表出、或いは新國家への讚歌と位置付けられてきた。

しかし「個人と國家の一致」は、個人の行爲・言葉のレベルに於いて、どのように表現されるのだろうか。國家言說と個人の言說との類似性を指して「一致」と呼ぶのであれば、それこそ個人レベルの發話の場を無視して、個人を國家言說の磁場から圍い込み、支配していく姿勢に他ならない。事後的に小說の缺點・限界を指摘するのは易しい。全ての小說が例外なくそうであるように、書くという行爲は、ある特定の時空間の言語制度の制約の下になされるものだからである。だが、讀むという行爲にも同樣のことが言える。讀み手も同

時代の言語制度の文脈でしか、小説の言葉と關わることが出來ないからである。言語制度に規定された書き手と讀み手双方の限界を對象化しないまま、小説が抱え込んだ歴史的限界を越えることなど果たして可能なのだろうか。

こうした手續きなしで、《青春萬歳》の少女達を對象として語ることだけは、愼重に避ける必要があるだろう。取り敢えず、少女達の置かれた言語制度を共有することから始める。言葉として在る少女達に於いて、國家言説は如何に取り込まれ、どのような形態で相互に共有され、個人の發話に至るのか、という「個人と國家」の距離を少女達と共に體驗することを試みる。そのことによって、五〇年代を生きた少女達が通過せねばならなかった言語體驗が、どれほど切實な痛みを伴っていたのか、初めて共感することが出來るだろう。

ここでは《青春萬歳》のテクスト冒頭部分に於いて、少女達の學生生活が如何なる形態をとって表現されているかを檢討した上で、テクスト全體を編成する枠組みと動力がどのように設定されているかを分析し、このテクストが仕掛けとして抱え込んだ「個人と國家」の距離について考えてみたい。

Ⅱ・「生活」と「憂鬱」[2]——テクストの枠組み

(1)「生活」のレベルの錯綜

《青春萬歳》の冒頭に於いて、學生生活の一環としてサマーキャンプに參加していた少女達は、登場するやいなや、高潮した氣分から一轉して「憂鬱」な雰圍氣に襲われる。

やめましょうよ！［……］どうしてこんな事を話さなくてはいけないの？　私達は今キャンプに來ていて、そんな事はとっくに忘れてしまっているのよ。試驗や授業、成績奬勵のバッジに私達の生活を邪魔させてはいけないわ。周小玲、あなただって此處で一日でも遊べば、すぐにも一切を忘れて、單純に樂しく、思う存分に生活を享受できるわよ［……］。（八頁）

試驗・成績を巡る「憂鬱」は、青春小説一般に不可缺の構成要素である。しかしこの科白が「憂鬱」に、キャンプという祝祭的場に集う「私達の生活」を鋭く對立させていることが、《青春萬歳》に於ける少女達の「生活の憂鬱」の質を決定している。それでは、少女達の「生活」と「憂鬱」は、それぞれ如何なる形態をとっているのだろうか。

《青春萬歳》に於いて最初に「生活」が言及される場面を

見てみる。少女達はキャンプ「生活」の興奮から眠れず、期待と緊張の中で夜明けを待つ姿勢をとる。自分達の興奮と共に、本來眠りにあるべき時間に、〝誇り高く自分の生活に向かって奔走し、様々な任務を擔っている〟（五頁）であろう勞働者の「生活」を想起した上で、〝生活の旋律はこのように休むことなく、騒々しく且つ力強いものだ〟（五頁）と概括する。つまりキャンプの興奮を媒介に、自分達をも含む全體的場として「生活」が語られている。しかし「生活」の興奮の直中にある少女達が感激を漏らすことこそあれ、對象として「生活」が如何なる形態をとるのか、意識し語ることは有り得ない。

キャンプを離れた少女達の「學生生活」場面には、「生活」の形態を示唆する一文がある。

美しい憧れであればあるほど、人は遙か遠いように感じる。しかし生活が飛躍して憧れが現實になった時、人々は自分達がまだ準備を缺いていたことをも發見するのだった。（二〇頁）

ここには「生活」が現實と等價ではなく、憧れといった意識を含むものであることが明示されている。しかも〝準備を缺いていた〟と、人々と「生活」との距離が語られていることから、この「生活」が對象化され得ることが分かる。對象としての「生活」が現實から隔ったものである以上、少女達が歡喜をもって現實の「學生生活」を謳歌するためには、彼女達の認識パターンに一定の操作を加える必要がある。

新學期の進級の喜びに關する敍述には、次のような注目すべき箇所がある。

彼女達はあたかも成長したから進級したのではなく、進級によって突然大きくなり、同時にずっと聰明で力強くなったかのように喜んだ。學生以外に、このように落ち着いて自分の上昇を意識し、自分がまさに歳月を重ねてあの光輝く未來に近づいていることを意識しうる者がいるだろうか？（二二頁）

少女達は現實・實體としての「生活」ではなく、まず對象としての「生活」卽ち言葉を消費する存在だと言えよう。實體から隔たった言葉、つまりは對象としての「生活」を取り敢えず受入れ、意識の枠組みを形成した後で、それに從って、新ためて現實生活を發見するのだ。少女達が自らを意識的に「生活」を支配する者として語るこの敍述は、「生活」を巡る少女達の意識の轉倒をも語っていることになるだろう。この轉倒した認識パターンは繰り返される。例えば、今

後何をすべきか語るうちに〝表彰のバッジが貰えなかった羞恥心が次第に追いつこうという決心の興奮した感情にとって變わり、誰もが自分が決心するや、きっとなし遂げられるということを疑わな〟（二六頁）い意識形態が擧げられよう。このような意識形態を前提に、現實行爲レベルに於いても、少女達はその對象としての「生活」に自己の「生活」を一致させる努力を始める。少女達の認識の布置では、この一致への過程が戰鬪[3]として把握される。從って現實行爲レベルは無償のものとして、對象としての「生活」に回收されることになるだろう。

しかしこの「生活」は別の局面を孕んでいる。對象としての「生活」には、それ自體の價値を保證する機能が含まれていない爲、それに自己の「生活」を一致させる過程で、少女達が「生活」及びそれに參加する自己の正當性を保證する、場としての「生活」を必要としてしまうのだ。つまり對象と自己の「生活」を一致させようと努力する少女同士が、相互に「生活」の共有を具體的行動レベルで確認することでしか「生活」が現象化しない、という轉倒が再度起こる。

聲を張り上げたところで賞を貰えるわけではない。だが誰もが競爭するかのように大聲で素晴らしいと叫んでいた。自分が叫ばなかったら、この勇壯なキャンプファイヤーの集いの前奏曲の熱っぽい雰圍氣を弱めてしまう、と彼らには分かっていた。（一一頁）

この「生活」への姿勢は、强迫觀念と言ってもよい。少女達は相互に、對象としての「生活」へと努力する個人の表現・行爲を見ることで、場としての「生活」の全體性を感じ、同時に自分の「生活」をその全體に位置付けるのだ。この「生活」は明らかに矛盾している。一方で對象としての「生活」によって個人の意識の枠組みを選びとり、自己を「生活」の支配者として析出するにも關わらず、もう一方では「生活」に對する他人の表現を己の鏡とすることでしか、「生活」に參加する自己を定位できないのである。從って言語主體少女Aは、別の少女Bの「生活」への表現・行爲によって定位され、少女Bは逆に少女Aによって定位されることになる。つまり少女A、B、C……の個別性は要求されず、主語としての各少女達と述部にあたる表現・行爲は、相互に變換可能ということになる。從って自己定位のために互いが互いを必要とするネットワーク[4]が、少女達の「生活」の形態を決定していると言える。

少女達は全編に渡って饒舌に「生活」を語り續ける。だ

が、前述したような「生活」のレベルの錯綜を、少女達が意識していたわけではなく、終始混同し續ける。對象としての「生活」と場としての「生活」の位相の差から生じる矛盾も、少女達には未だ意識されていない。寧ろこうした「生活」という認識が内包する位相的差異を意識する必要もなく、緩やかな共生關係に身を委ねていたのが、少女達の「學生生活」だったと考えられる。それでは、少女達の「生活」を脅かしていた「憂鬱」とは何だったのだろうか。

(2) 「生活」の修復作業

〝もしずっと此處でキャンプをして、試驗や質問、合格や不合格なんてなかったらどんなにいいか。〟(八頁)というように、試驗・成績を巡る心配事から少女達が自由だったわけではない。しかし對象としての「生活」への一致の爲には、現實行動レベルでは努力を辭さない少女達にとって、これは本質的「憂鬱」にはなり得ない。前述の科白を受けて、すぐさま別の少女李春が反論する。

あなたの言うことは間違っているわ。ずっと此處でキャンプをしたって意味がないでしょう。生活はいつだって一種の慌ただしい追求なのよ。靜かさや安逸は一時のもので、慌ただしい追求に對する一種の報い。〔生活は〕瞬時のものだからこそ、美しく、價値があるものなのよ……(八頁)

ここでも「生活」は、レベルが錯綜したまま語られる。この科白だけを見るかぎり、他の少女達の「生活」認識と何ら變わるところがない。但しこの科白が、對象としての「生活」と場としての「生活」の分裂を明確に意識した最初の用例であり、しかも他の少女達の「憂鬱」を引き起こしたことは、注意する必要がある。何故なら前述したように、「生活」のレベルの位相的差異を意識することなく、相互に「生活」を保證しあっていたのが、これまでの少女達の「生活」の在り方だったからである。この李春の科白は、こうした少女達の「生活」のレベルの錯綜・矛盾を、不意に浮上させたものと讀めるだろう。少女達のネットワークに於いて、學習行爲が對象としての「生活」に組み込まれていない時點で、李春がその共有を前提にして發言した爲、場としての「生活」の保證機能を停止させ、少女達のネットワークに龜裂をいれてしまうのである。この龜裂こそが、少女達の「憂鬱」を喚起していたと言えよう。少女達は話題を打ち切ることによって、キャンプ「生活」に相應しい場を回復しようとする。

小説冒頭のこの場面で、少女達が成績を巡る「憂鬱」に對して素早く反應して、「私達の生活」の修復をはかるのは、それが場としてのキャンプ「生活」での不協和音だったからに他ならない。(1)の最初に引用した科白の直前に、少女達は成績・勉強をトピックにして饒舌な會話を交わし、暫し沈默して各自勝手な物思いに耽っている。各自が可視的な現實レベルでの行動を停止し、他の少女達に共有出來ない身振りが現象する。こうして李春が引き起こした「憂鬱」はテクストに於いて可視化される。

キャンプ「生活」という場では、學習は單に外部から侵入してきた情報に過ぎない。少女達は龜裂を無視し、素早くその記憶を忘却し、キャンプ「生活」を構成する行動を組織する。「生活」が現出した時點で「憂鬱」は回避される。しかし、對象としての「生活」と場としての「生活」の分裂を恒常的に生きることが、小説に設定されてしまったとしたら、少女達は如何に對處するのだろうか。

少女達の意識に於いて、「憂鬱」は決して對象化され、形態として語られることはない。言説として「憂鬱」を支配し語ることが出來た時點で、それはもはや「憂鬱」ではない、との理由も考えられる。しかし、より重要な要素は、少女達の意識の枠組みとして設定された「生活」認識では、この「憂鬱」を言語化し得ないことによるものだと思われる。根源的に矛盾を孕む「生活」觀によって組織された共生關係。それを亂す不協和音として現れる「憂鬱」に對して素早く共生關係を取り戻そうとする運動。これが、テクストを讀む基本的枠組みとなる。

Ⅲ・「新生活」の提示――テクストの動力

(1)　國家の方針轉換

成績というトピックは、少女達のキャンプ「生活」という場を脅かした一挿話に止まらない。これは校務委員會が〝前期試驗の成績に基づいて、學校が表彰のバッジを交付〟し、〝後期から授業を特別に强化する〟(七頁)ことを決定した、という情報を受けての會話であり、「學校生活」の場では具體的行動及びその共有を要求されるからである。少女の一人楊薔雲の科白から、この決定が少女達の「學生生活」を大きく轉換させるものだったことが伺える。

やはり試驗の成績をとり上げるのね。〔……〕前期なんか私、半分授業に出なかったわよ。節約檢査委員會で資料の清書をしていたから、期末試驗の時は落第するんじゃな

いか、と本當に不安だったわ。（七頁）

〝やはり〟[5]という言葉から、こうした學校の方針轉換は初めてのものではなく、以前の狀態への回歸を意識した發言と考えられる。しかし《青春萬歲》に於いて、この以前の方針轉換に關する記憶が、少女達の意識卽ち象徵秩序から除去されている。これ自體重要な問題[6]であるが、ここでは取り敢えずテクストと共犯關係を結んで、讀み續けることにする。

成績重視という方針轉換の衝擊は、少女達の中で唯一の黨員である鄭波の身に於いて、最も顯在化する。解放以前から地下活動に參加している鄭波は、〝生活が沸き立〟った解放を經驗する。學校生活が正常化した五〇年以降も、抗米援朝戰爭、三反運動といった一連の運動の學內での組織等、活動に沒頭している。國家政策卽ち對象としての「生活」に呼應して、自ら先頭に立って實行し、且つ他の多くのクラスメートをもその「生活」に卷き込み、その集團「生活」の直中に自分も所屬していることを確認する過程は、まさに前述した少女達の「生活」認識に他ならない。鄭波の「學生生活」が如何なるものだったのか見てみる。

絕え間無く續く緊張した運動の中で、鄭波と他の學生の優秀分子はある種普通とは異なる生活に慣れてしまった。夜は自習をせずに大講演會を聞きに行き、課外活動の時間には各種の會議を召集し、授業時間には講義を聞きながら教師に〝曖昧な觀念〟があると注意したり……。それに自分がこのまま敷かれたレールにのって勉强を續けるだろうとは思い到らないようで、幹部になって從軍し、江南か朝鮮に行けという組織の配置轉換を〝いつも準備して〟待っていた。（一九～二〇頁）

鄭波にとって學校とは、「生活」現象が發現する場でしかない。鄭波自身が言うように、この場が學校である必然性はなく、〝臺灣での地下工作〟（一九頁）でも從軍でもよいことになる。鄭波が生きている場所は、黨全體が邁進しつつある歷史的過程という物語であって、現實の學生生活ではない。今この現在という場所は、鄭波にあっては組織の正式決定を待つ迄のモラトリアムに過ぎないことになるだろう。

もう一つ注意すべきなのは、解放前の地下工作參加から一九五二年迄、鄭波の意識に於いては、「生活」の不協和音が全く認められないことである。鄭波の地下工作活動參加については、反國民黨の言葉が流通する磁場に屬しながら、革命の實際行動に參加していない自分の存在を羞恥と捉えることが契機となっている。對象としての「生活」との一致を必須

條件とする鄭波の意識の枠組みは、すでに解放前から選びとられていることになる。彼女の意識が、前述してきた少女達のそれであることは言うまでもない。

一九四九年一月の北京解放という事件は、解放された市民の側から見れば、生活の大轉換であった筈だが、鄭波の「生活」はそれらとは完全に次元を異にすると言えるだろう。むろんこれはテクストの書き手王蒙レベルの認識と等價ではない。鄭波の「生活」という意識の枠組みからは除去された四九年の斷絶を、テクストは丹念に書き込んでいる。本論文の分析對象部分からは外れるが、擔任の袁先生が解放以後、政治活動に於いて逆に學生から指導される立場にまわった教師としての困惑等への目配りを書き手王蒙は忘れていない。從って四九年解放を「生活」の連續性ひいては必然性と把握する鄭波或いは少女達の象徴秩序(7)は、書き手王蒙の意圖的隱蔽・操作と考えてよいだろう。このようなテクスト内人物の認識の時差が、王蒙に於ける解放の問題を解く一つの手掛かりとなるだろうが、ここでは鄭波の意識では一九四九年ではなく、一九五二年の方を「生活」の斷絶と受け止めていることを確認しておけばよいだろう。

この一九五二年が人民共和國に於いて如何なる年だったかは、テクストにも詳細に書き込まれている。翌年の第一次五ヵ年計畫開始を目前にして、國家は「新しい生活」をうちだしていた。社會主義國家建設の任務が日程の首位にのぼり、各種のメディアが「生活」のニューモデルを提示し、鄭波を含む少女達もこの「生活」の共有を迫られ、同時にこれを話題にし始めていた。だがこの急なモデルチェンジは少なからず人々に混亂をもたらすことになる。

この年、社會主義國家建設に要する人材養成のための教育改革が行われ、大學では大幅な再編成・學部改正をしている。ここでは、教育改革が少女達の「生活」に與えた衝撃を見ておく。

高校生達は未來の新しい大學生活を幻想していた。この年、團中央は〝五四〟を記念した指示の中で、高校卒業生に積極的に大學入學を準備するよう呼び掛け、高校生の注意も引いた。彼らは國家建設を語り合うにつれて、大學進學の志願を語りだした。かつて團支部が〝大學進學〟を口にする者を〝落伍分子〟とした一時期があったのだ。(二一頁)

書き手王蒙自身も所屬していた新民主主義青年團の青少年への呼び掛け。しかも從來とは正反對の政策轉換に、〝人々

は生活の變化を歡迎、吟味、鑑賞する間もなく、たちまち生活の變化の中へと卷き込まれていった。〃（二一頁）と、テクストの敍述は「新生活」のもたらした變化を概括する。成績重視をうちだした校務委員會の決定は、この政策轉換と呼應しているわけだが、少女達の「生活」という意識及びネットワークが如何なる反應を迫られるのかは、いまだ不明である。ただ、この社會的變化を概括する敍述部分にも、「新生活」の到來が單に從來の「生活」に新しい局面を付與したに止まらず、受容者の「生活」スタイルにも質的な變化をもたらしたことを伺わせる一文がある。

〃少年ボリシェビキ〃達も自分の學生時期に對して長期の計畫をたて始めた。（二二頁）

ここには各自が自分の將來を決定し、そのために各々が努力するというライフスタイルが見てとれる。同じ社會主義建設という目的を共有しながらも、各自が相互に差異を有した生活を抱え込む。[8] この身振りはⅡ章で確認した少女達の「生活」とは明らかに異なるだろう。先ずは、少女達が「新生活」を自らの意識の枠組みとして選びとる契機を見ていこう。

(2) 浮上する他者

校務委員會は先の決定通り、全校から四〇數名を表彰する。表彰式の壇上に臨む少女達は、喜びに頰を紅潮させながらも、恥ずかしげに俯く。他の少女達の視線に對象化されるのを避けるかのように、壇上の少女達の姿勢は控え目である。どの少女もすぐさま壇を下りて學生席に戻り、別の少女の表彰を祝福する側にまわる。表彰された少女達によって選びとられたこうした姿勢が、ある一定のコードによったものであることは、李春の對照的姿勢との比較から伺える。李春は悠然と胸を張り、目に感激と氣分を晴らしたような表情を浮かべ、對抗的な姿勢をとる。この李春の姿勢は、確かに少女達の從來の「生活」と反するものであったが、それ自體は問題ではない。何故なら李春の問題は、なにもこの五二年に始まったものではなく、五〇年一二月に遡るものであったことが、テクストの記述から知られるからである。

五〇年秋に轉校してきた李春は、その優秀さと闊達な性格でクラスメートの尊敬と信頼をかち取る。四九年から新民主主義青年團の總支部委員を勤めた經驗もあり、轉校後も抗米援朝運動に積極的に參加し、積極分子の表彰を受けている。このような李春の位置が一八〇度反轉したのが、五〇年一二

月だったのである。抗米援朝戰爭の最中、軍事幹部學校が學生を應募する。

自分は高校一年生で、瞬く間に大學生だ。大學を卒業したら、すぐ技術師になって……。今學業を中斷したら、將來はどうしよう？　抗米援朝は恐らく一時的なものだから、軍隊に行ったら完全に前途がなくなってしまう。その上女だから、せいぜい看護婦になるのが關の山だ。それに比べて大學に入ったら、醫師、醫學者にだってなれる。それに將來戰爭がなくなったら、軍人が全員とも復員するし、自分も年をとってしまっている。それから何をしようというのか？……いや、絶對に申込みはすまい。（二八頁）

李春の意識下に於いても、國家言説が否定されていたわけではないことは、注意しておく必要がある。つまり李春の行動が少女達の非難を引き起こしたのは、國家が示す對象としての「生活」に自己の全てを投入しきれなかったからだ。「生活」に對して觀念的に贊意を表すだけでは不十分であったということであろう。當時、國家言説と自己との一致は、志願という行動によって表される。李春が無自覺だったのは、國家言説と一致した「生活」を送り、自ら主體的にその「生活」を選び取り、行動していると感じていた少女達のプライドという一點だったといえるかもしれない。少女達は李春の行爲を友情に對する裏切りと位置付け、彼女を自分達の「生活」から排除する。一方李春も少女達によって存在價値を抹消されたことを見下されたと解釋し、反抗心を抱く。こうした少女達の對立というコンテクストを念頭に置いて、冒頭のキャンプ場面での「憂鬱」に戻ってみると、少女達がかなり辛辣なあてこすりを投げつけあっていることが了解される。つまり他の少女達に存在を無視されてきた李春が、〝これまで見下されてきたけれど、その間も私は勉强に努力を注いできたのよ。あなた達もこれからせいぜい努力することね。〟という言外のニュアンスを込めた科白だったと推察されるのだ。しかし、繰り返すがこの兩者の對立は、少女達の「生活」という意識のレベルでは、一九五二年迄、問題になることがなかったのである。つまり「生活」という意識の枠組みでは、李春の存在は單にクラスメート間のネットワークを亂す異分子として、隱蔽可能なものだったと思われる。

だが國家の示す「生活」自體が變更された。國家の新政策の言説に從えば、李春もその新任務を達成した優秀な戰士であり、國家言説を共有する少女達全員の誇り・喜びであるだろう。むろん少女達もその「新生活」のもとに自らを編成

し、反轉する形で「新生活」を支配し、行動をとることに疑問があるわけではない。少女達の「憂鬱」は、李春の反抗的姿勢が他ならぬその國家言說を忠實に踏まえながら、表現されているという現實に直面したことに起因する。「新生活」は從來の「生活」が排除してきた部分を中心に据えたものであるにも關わらず、認識のレベルでは同じ「生活」という枠組みを用いて、少女達はこの兩者の隔絶を乘り切らねばならなかったのである。國家言說移行期の一瞬の間隙を突いて、少女達は初めて李春という一人の他者と向き合わざるを得なくなったのである。(9)

少女達は「生活」という認識では說明不可能な事態に對して、徹底して無防備である。この新事態は、黨員の少女達や黨支部書記兼校長が考えるように〝政治任務としての學業對學業のための學業〟といった二項對立の說明體系に收まるものでないことは、これまで見てきた通りである。寧ろ、學內七人の黨員のうち一人しか表彰されず、今までの他のクラスメートを動員する立場が、急にその根據たる黨員の先進性を奪われて危機感を覺える箇所にこそ、彼女等黨員と個人主義分子李春が共有する問題があったと言えよう。

今後の要求は今までとは違います。授業をきちんとマスターしないと全然話になりません。勉强は恒常的で緻密、着實な勞働で、單に情熱やスローガンやスターリンの所謂〝騎兵式突擊〟のようなものでは駄目です。問題はこのように先鋭に置かれているのです。つまり全員〔國家の新しい要求に〕追いついて、政治工作と科學への精通を結合させるか、或いは落伍して空論政治家に成り下がって、君達がすでに獲得した威信や影響力を失うかなのです。（二五頁～二六頁）

この校長の叱咤激勵自體は、黨員少女達の「憂鬱」への共感もなければ、「憂鬱」を說明する意志をも缺いている。しかし、校長が對象としての「新生活」に追いつけない黨員の存在形態を、〝落伍〟とか〝空論政治家〟と表現していることは注意しておく必要があるだろう。何故なら、「生活」と一致しない狀態を羞恥と受け止める少女達は、〝落伍〟・〝空論政治家〟というレッテルから恥辱に塗れた自分達の姿を想像してしまい、そのことが黨員少女達の「憂鬱」を形作っていたからである。

この校長の科白をうけて、一人の黨員少女が不安を吐露する。

むやみに勉强ばかりして政治に關わらないクラスメート

が得意になって、これまで政治活動に消極的態度をとってきたことを正しかったと考えるんじゃないか、心配ね。（二六頁）

少女達は次々同調する。別の少女が〝今後仕事がやりにくくなったわね。〟（二六頁）と言う。少女達が持ち出した〝政治に關わらないクラスメートの得意氣な顔〟には、先進分子として參加している「現在の生活」から〝落伍〟する自分達の姿が對置されていたと言えるだろう。

「新生活」を前にした黨員少女達は、「憂鬱」を一瞬垣間見せる。むろん黨員に躊躇は許されない。〝それではどうすべきかしら？　だからといって勉强を强調しないということになる？〟（二六頁）という校長の誘導に、一人の少女が答える。〝彼女達と競爭しましょう。齒を食い縛るの。絶對彼女達よりいい出來でなくては〟（二六頁）。ひとたび、對象としての「新生活」という意識の枠組みが設定されるや、テクストは自ずと作動し始める。黨員少女達は「新生活」に參加している者として自らを析出し、その位置から自己を一致させるべく、具體的行動を起こすのである。

この黨支部書記兼校長と黨員少女達の會話場面には、兩者の認識の位階的差が確認出來る。校長が如何なる認識の枠組みを持って、前述したような發言に及んだのか、ここでは判斷がつかない。しかし、少女達が「現在の生活」の場からの轉落として〝落伍〟をとらえたのに對し、校長はいち早く「新生活」の枠組みを用いて、國家言說からの〝落伍〟として描きだしてみせている。こうした認識の時差は、自ずと讀者を書き手王蒙の黨組織に關する認識の在り方へと向かわせる。取り敢えず、ここでは少女達が校長の誘導に從って「新生活」に取り込まれる直前に一瞬見せた「憂鬱」を確認しておけばよいだろう。そしてこの一瞬の「憂鬱」と共に現れたのが〝得意氣なクラスメート〟という「現在の生活」の場を脅かす〝他者の影〟だったのである。短い會話場面に於いて、この〝他者の影〟は、少女達の意識が「現在の生活」から「新生活」に移行する過程で、〝競爭のライバル〟更には〝黨員の指導を必要とする對象〟へと、その位置付けが變化している。この變化と共に、黨員少女達は「憂鬱」に關する記憶を消去する。黨員少女鄭波は言う。

私は高校生として新規に始めなくては、と考えているの。やらなくてはいけないことが澤山あると思うわ。ちょうど〝民聯〟に參加する前、自分が實際の革命行動に參加していないことが、こんなふうに恥ずかしかったことがあ

るけど。變な話だけど、私は自分に對してかつてなし遂げたことがない事を迅速にせよと命令する時、殊の外嬉しいの……(三〇頁)

もはや鄭波の「憂鬱」を記憶する者は、テクストを冒頭から讀んできた讀者だけである。鄭波のこの科白を聞いた友人の楊薔雲は、瞳に〝眼前に見えるものを映すのみならず、一種の朦朧とした美しい表情を帶び〟、〝奬勵のバッジを交付するのは、新しい生活の雰圍氣を作る助けになるわ。鄭波、私達どうしても頑張らなくてはね!〟(三〇〜三一頁)と、場としての「新生活」を共有しようとする。黨員鄭波の對象としての「新生活」への表現・行爲によって、自らを定位しようとする非黨員の薔雲。このテクストは「生活」を巡る認識の時差を設置することで、登場人物間に一種の階層秩序を明確に設けていることが、推察される。

一九五二年。國家の方針轉換によって、對象としての「新生活」が少女達に示された。この「新生活」の提示こそ、テクスト《青春萬歲》を作動させる動力と言える。ひとたび運動を始めたテクストは、最初に設定された枠組みに從って、否應なしに少女達を「新生活」なる秩序再編へと驅り立てることになるだろう。

Ⅳ・仕掛けとしての「憂鬱」——おわりに

國家言說を個人が受容する過程を書きながら、その際個人が通過せねばならない「憂鬱」自體がテクストの仕掛けとして設定されている。そこにこそ《青春萬歲》に於ける「個人と國家の一致」の質が如何なるものであるのか、伺えるであろう。《青春萬歲》は果たして「個人と國家の青春の一致」を書いているのだろうか。書き手王蒙は本當に新國家への讚歌を表出していたのだろうか。

王蒙の五三年の執筆開始自體、五二年の國家の教育方針の轉換をうけて提出した大學進學希望の申請が、黨上級に批准されなかったという「個人と國家」の不協和音を契機とするのは、周知のことである。第一次五ヵ年計畫という新政策に呼應し、建設の第一線で働くべく、大學に進學して建築を學びたいと考えた王蒙に最初の危機が訪れる。《青春萬歲》自體が、高校三年生という大學進學を控えた少女達の學生生活を扱ったテクストであることを思い出す時、創作開始時の王蒙の個人的經歷との類似性に氣付かされる。つまり「個人と國家の青春の一致」という自他未分化の共生關係に入った最初の龜裂こそ、王蒙の創作との密接な關連性を認めることが

出來るのではないだろうか。この關連性については今後更に檢討を要するだろう。

《青春萬歲》に於いて、少女達は「生活」という言葉で現實生活を圍い込んで隱蔽する。これは、少女達を「生活」という言葉で圍い込む書き手王蒙レベルでの過程とまさに重なる。小說冒頭のキャンプ場面で、少女達は祝祭的な場で特權的な「學生生活」を謳歌していた。しかしこのキャンプ場も、子供の遊戯的色彩を持つとはいえ、出入りする際に合言葉を必要とする歩哨を配置した圍い込まれた場であったことは、新ためて想起しておいてもよいだろう。「個人と國家の龜裂」を抱え込んだ王蒙は、少女達と如何なる「憂鬱」を共有しながら、少女達を「生活」という言葉で圍い込み續けたのだろうか。

註

（1）《青春萬歲》は一九五三年一一月～一九五四年末に初稿が執筆された。この初稿は中國青年出版社の編集者蕭也牧と作家蕭殷の意見をもとに、一九五六年九月に修訂稿を完成。〈北京日報〉等に部分的に發表するが、王蒙が右派分子と認定されたことから、單行本の出版が實現したのは、名譽回復後の一九七九年五月のことである。本稿では、この人民文學社版を使用した。

（2）「生活」と「憂鬱」は、いづれも分析概念として用いている爲、テクスト内に對應語句が存在するわけではない。なお本稿では、「生活」の存立形態を問題としており、發生論は視野に置いていない。發生論も「生活」の空間的支配領域との關連性から、重要な問題ではあるが、此處では、例えば鄭波（登場人物の一人。黨員で積極分子という設定）の「生活」意識が、江南や朝鮮や臺灣への從軍という「未解放地區」との交通に於いて生じていることを擧げるにとどめる。

（3）戰鬪や戰士のイメージはテクスト全編におよぶ。これは「生活」の發生が、外部との戰爭（＝交通）と關連性があることに因るものだと推測される。註（2）參照。但し「新生活」編成以降もこのイメージの使用は繼續されるが、その意味内容は全く異なる。この點に關しては、別稿に改めて論じてみたい。

（4）「生活」を價値とする根據が、對象としての「生活」自體、或いはこの「生活」モデルの發信者である執政政權の權威のみに支えられているわけではないことを示しているだろう。但し、このことは少女達のネットワークに階層性が存しないことも、システムが介在しないことも意味しない。

（5）原文は還。

（6）この消去された時期が、王蒙論のアポリアとされる革命原體驗を形成したと見做される時期と重なることは、この體驗

をテクストレベルで考えた場合、非常に重要になってくるだろう。

（7）「生活」という意識と行動の共有の自明性は、少女達のネットワーク内でも限定される。例えば、少女達の一人吳長福が描く「生活」は、青年團のサークルで豫約講讀した雜誌の閲覽や大掃除の際に人一倍働いたこと、鄭波の仕事の補助等の行動で構成されており、鄭波の「生活」との對照を成している。吳長福が青年團の支部會議に參加出來ないことが示すように、政治的エリートと非エリートとの階層が、黨員鄭波等の意識に上らないとはいえ、「生活」ネットワーク内に於いて確固として存在していたことは、注意を要するだろう。テクスト八〇頁參照。

（8）可視的行動のレベルで階層秩序或いは差異が要請される爲、行動を共有する少女達のネットワーク、それによって保證されていた意識の枠組みが、從來と同じ形態では存立し得ず、不可逆的變化を餘儀無くさせられることが豫想される。「新生活」が單なる「生活」への添加でも、漸次的な發展でもない所以である。

（9）少女達の對立については、先行研究に於いても問題にされていなかったわけではない。例えば曾鎭南は、テクストから積極分子鄭波や薔雲の學習行爲を價値とする五三年體制への不適應の萌芽を見出し、それによって引き起こされる感情を〝困惑〟と名付け、この困惑が對立の基底にあると解釋している。その爲、氏はテクスト《青春萬歲》を獨自の見解を持つ知識分子に對する偏見・迫害を行った〈歷史〉の先取りと位置付けている。氏の見解には幾つか問題點がある。一つに、鄭波はともかく、薔雲は從來から成績優秀であり、この國家言説移行期にも、學習の行爲レベルではさほど困難を覺えていなかったというテクストの基本的設定への無視は、氏の事實誤認としか思われない。更に、テクストの中間で鄭波の學習・成績の問題は行爲レベルでは解決されるが、少女達の對立の解消とは明らかに時差が存在しており、對立は行爲レベルの實現ひいては五三年體制への適應レベルの問題に止まらないと思われる。氏はこの對立解消と學習行爲レベルの實現を同一次元に於いて論じている爲、この解消を不自然に感じ、解消を促すテクストの動力として〝生活經驗ではなく、若者の樂觀的な理想〟を擧げ、テクストの〈歷史〉的限界を指摘している。此處で氏の〈歷史〉觀を檢討する餘裕はないが、本稿は、體制への順應を個人の適應能力の問題に還元して、この對立を知識分子への偏見の〈歷史〉の先取りとして捉えるのではなく、不可避的に體制への適應を迫られる個人の〝困惑〟を問題にし、その〝困惑〟のレベルに於いて「歷史」を構築する試みである。《王蒙論》（一九八七年一一月・社會科學出版社）參照。